

修士論文要旨

動物園を舞台にした児童文化運動の展開～到津遊園と到津林間学園の変遷をもとに

北九州市立大学社会システム研究科

2019m30007 原賀いずみ

近年、総合的学習の導入や環境教育の視点から、動物園における〈インタープリテーション〉が注目されている。本研究は、「児童のための動物園教育」という発想がまだ日本にない時代に、動物園を舞台に展開された児童文化運動の変遷を歴史的に明らかにしたものである。

研究の対象は、北九州市にあった到津遊園（現到津の森公園）と園内で行われた動物園サマースクール 到津林間学園とした。この園では、1937（昭和12）年から子どものため動物園サマースクールが80年以上続けられており、2019年までに参加した児童総数はのべ73,163人。日本で一番長く、多くの児童を育てた動物園サマースクールである。到津林間学園では、なぜこのような活動が生まれ、継続されてきたのか、本研究ではこの活動に関わってきた実践者の足跡や思いを明らかにするために、第3代林間学園学園長の古村覚が残した「林間タイムス」や10年毎に発行された記念誌『林間学園のあゆみ』などを基に歴史研究を行った。

時代区分としては、1932（昭和7）年に到津遊園が誕生し、2000（平成12）年に一旦閉園し新たな到津の森公園に移行するまでの68年間をほぼ10年毎に6期に区分し、これに創立前期と合わせて7期とした。

まず第1章では到津遊園の組織形態を示し、次に本研究における「児童文化」という考え方を示した。現在、児童文化運動といえば狭義の児童文学中心の運動として捉えがちである。そこで本研究では滑川（1970）の提唱する「児童がみずから創造した文化」と「おとなが児童のために与える文化」の総称と捉え、この二つの文化が児童の成長発達を促し、やがて「将来の国民文化の創造的担い手」をつくる包含的な統一概念であるという考えに基づき「児童文化の概念図」を作成した。

第2章では到津遊園と到津林間学園の活動に大きな影響を与えた久留島武彦や阿南哲朗、黒田晴嵐などの足跡を辿り、北九州ではどの様に児童文化活動が生まれ、動物園を舞台に発展したのかを明らかにした。到津林間学園の初代学園長である久留島は、日本で初めて「口演童話」を語り「お伽倶楽部」という児童文化団体を組織した人物である。彼が創刊した機関誌『お伽倶楽部』の記事には、野外活動、ボーイスカウトやアメリカの通俗教育施設の紹介、上野動物園の黒川義太郎らによる動物読み物などが多数見られた。また「お伽幻灯隊」を組織し、動物の活動写真を子どもたちに紹介しており、動物園は理想の教育施設だと考えていたことが明らかになった。

3章では、明治、大正、昭和に流行した「林間学校」の活動形態を先行研究によって明らかにした。その上で、口演童話家や教育者が集い「児童芸術夏季林間学園」として到津林間学園が誕生し、当時のプログラムが現代に受け継がれていること、戦争の影響などを示した。

4章では、戦後わずか一年で、園長として到津遊園と林間学園を復興させた阿南の思いと九州童話連盟を立ち上げ、林間学園の運営を支える仕組みをつくった先見性を明らかにした。さらに当時行われたキャンプや、電車学校などに「お伽倶楽部」やボースカウトの影響が見られることを示した。

5章では、高度成長期、西日本一の動物園を目指した経緯を明らかにした。この取り組みの中で行われた「第1期移動動物園」では、口演童話家たちも同行し、子どもたちが動物とふれあう前に心を解き放つ役割を担った。この項ではアメリカの国立公園をルーツとする「インタープリテーション」について論じながら、「口演童話」との共通点を検証した上で、到津の実践を「到津的インタープリテーション」の萌芽として示した。

6章では、充実期と円熟期の20年年間をまとめて、動物園教育の時代として章立てした。この章では、アメリカの動物園視察で学んだ獣医師の森友が園長になり、「動物園は教育施設」として地域社会に発信するために、林間学園の動物プログラムや生息環境を伝える企画展などを継続的に行ったことを示した。

7章では、絵本で平和教育を行った古村が、園内の動物殺処分をテーマに3冊の絵本として出版。文芸の日の教材として活用され動物慰霊碑に参るプログラムも生まれた。また、「到津遊園林間学園沖縄を学ぶ少年団」の活動も14年連続で取り込まれるなど、平和教育が推進されたことを示した。

8章では、上野動物園の児童文化と題して、戦後上野動物園で生まれ日本全体に広がった「子ども動物園」や「サマースクール」を取り上げ、到津遊園の活動と比較した。

終章では、これまでの研究の総括として、児童文化という統一概念が、グローバル化する社会状況の中で、環境教育さらにはESDやSDGsという概念に変容し、子どもと大人が共に持続可能な未来をつくるための運動の舞台として、動物園が展開されていくと言う仮説を立て、発展図を示した。

以上の様な研究的考察を基に、①動物園と児童文化団体との協働の視点②動物園における児童文化運動という視点③日本の児童文化活動を牽引した初代学園長久留島武彦の影響という視点④「林間学園」という活動形態の視点⑤到津遊園及び到津林間学園で生み出された「インタープリテーション」の萌芽的な視点があったことが明らかになった。